

2002年3月  
剣岳事故報告書

信州大学山岳会

## はじめに

2002年3月21日、剣岳を縦走中現役1年生1名が滑落するという事故を起こしました。奇跡的に事故者は大きな怪我を負うことなく、幸いにも自力下山することが出来、大惨事には至りませんでしたが、我々指導的立場にあたる上級生は多く反省しなければならない事故がありました。個人の事故というよりは、会の組織力の低下、怠慢、過信が浮き彫りにされた今回の事故を慎重に振り返り、改めて会の力を付け直し、より安全な登山を、そんな思いを込めてここに事故報告書を作成いたします。

信州大学山岳会 大木 信介

## 目次

はじめに	· · · · · 1
山行計画の概要	· · · · · 2
事故の概要	· · · · · 2
行動概要	· · · · · 4
留守本部の動き	· · · · · 9
事故分析・反省	· · · · · 10
高谷の報告	· · · · · 14
2002年度 CL 佐藤から	· · · · · 15
山行リーダー大木から	· · · · · 15
事故に思う	· · · · · 16

## 山行計画の概要

### ① 場所

北アルプス剣岳周辺

### ② 期間

2002年3月19日～4月4日(7+9)

### ③ 参加メンバー

L大木信介(5年)・花谷泰広(OB)・岸本俊朗(5年)・横山勝丘(4年)

片寄哲生(1年)・高谷英太郎(1年)

計6名

### ④ 行動計画

3月19日 松本=伊折～馬場島 TS

20日 TS～赤谷尾根 TS

21日 TS～赤谷山山頂 TS

22日 TS～北方稜線～大窓～池の平山～小窓 TS

23日 TS～三の窓 TS

24日 TS～剣岳山頂～早月尾根～早月小屋 TS

25日 TS～馬場島～伊折=松本

26日

↓ 予備日 9日間

4月3日

## 事故の概要

### ① 事故発生日時

2002年3月21日 7時05分

### ② 事故者

高谷英太郎 (経済学部1年・20歳)

### ③ 事故発生場所

北方稜線・赤ハゲ～白ハゲ間の稜線

### ④ 天候

晴れ

### ⑤ 行動記録

3月19日 松本=伊折～馬場島

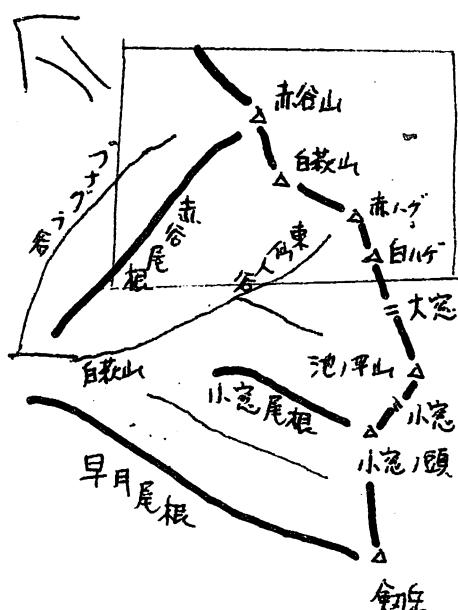
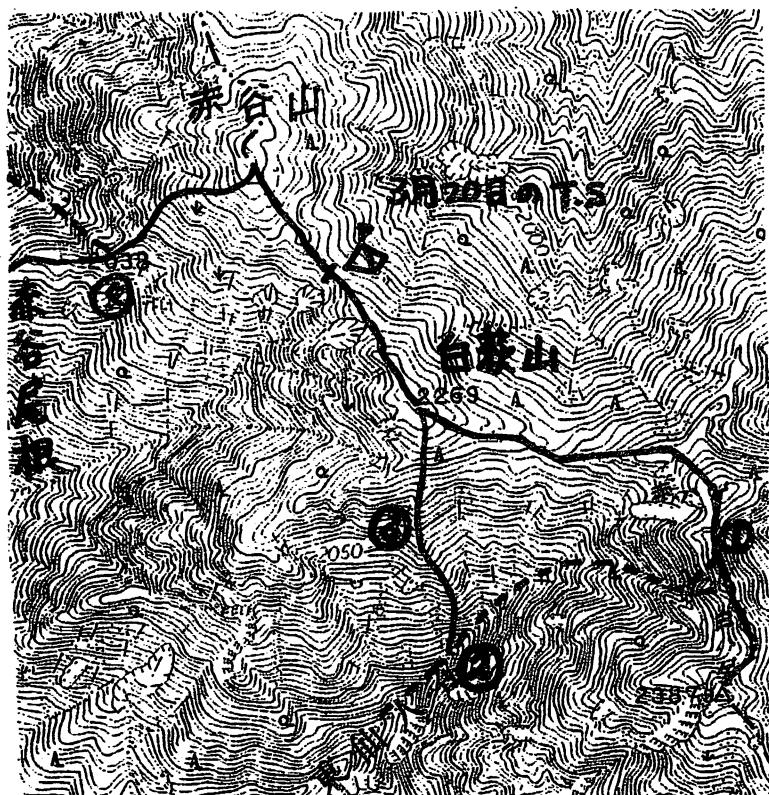
3月20日 馬場島～赤谷尾根～赤谷山(北方稜線へ)～赤谷山直下のコルに幕営

3月21日 TS～赤ハゲ～事故発生～往路退却～ブナグラ谷～馬場島～伊折=富山日赤  
=松本

## ⑥ 事故発生状況

北方稜線・赤ハゲ～白ハゲ間を歩行中、1年高谷がアイゼンを滑らせ、ルンゼに吸い込まれるように東仙人谷方面に滑落。滑落を見ることが出来たのは最初の30mほど。その後、ルンゼが急なため視界から消える。推定標高差500mの滑落。

【地形概念図】



- ①事故発生箇所
- ②滑落が止まった箇所
- ③高谷が登り返した尾根
- ④赤谷尾根からブナグラ谷への下降地点

## 行動記録

3月 19日 松本=伊折～馬場島

晴れ。伊折で下車し歩き始める。10時半出発。5月のような陽気のなか汗だくになりながら1時過ぎに馬場島に到着した。本来はもう少し先に進む予定だったが、夜中に激しい雨が降ると予報で出ていたため入山初日からずぶ濡れになるのはさけようと馬場島の登山センターに隣接する建物の下に幕営する。予報は的中し夜中は暴風雨だった。

3月 20日 馬場島～赤谷尾根～赤谷山(北方稜線へ)～赤谷山直下のコルに幕営

朝のうちは雨雲が残っていたが行動を開始するころには青空が広がり日中は前日と同じような陽気となった。赤谷尾根に取り付くも雪は少なく締まっていて快適に進む。両線上の空も雲ひとつなく終日剣岳周辺が一望できた。途中上部でアイゼンを装着するが一步踏み出すごとにダンゴ(注1)になるほどだった。大幅に予定を短縮しこのひのうちに赤谷尾根を抜けた。3時前には赤谷山から下った鞍部に幕営した。

3月 21日 TS～赤ハゲ～事故発生～往路退却～ブナグラ谷～馬場島～伊折

5：30 出発

この日は午後から天候が急変するとの予報だったため一つ先の「大窓」を目指して行動し、早いうちに行動を切り上げ幕営に万全を期し嵐に備えることとした。朝から風はある程度ふいていたが厳冬期と比べるとぬるく感じるくらいだった。途中ひと登りしたところで休憩を取った。

7：05 事故発生

休憩後再び行動を開始する。休憩地点から先は急に様相が変わり鋭い稜線となつた。信州側へは雪庇が巨大なマッシュルームのように発達し圧巻の光景だった。いくつか急な雪壁を越えたり、雪面のトラバースを交えて進んだ。

岸本・片寄(1年)・花谷・横山・高谷(1年)・大木の順番で一年生を挟むという形で隊列を整え、クラスト斜面や急な雪壁も前後から指示し、フィックスを貼る時間よりもゆっくりでも進む方針で前進した。

この後、通称「赤ハゲ」を通過後事故は発生した。高谷が氷結した稜線の通過中に足元を滑らせ転倒した。すぐ後ろにいた大木は高谷を捕まえようと試みるが転倒後すぐに滑落が始まり、大木の試みもむなしく高谷は東仙人谷へと続く急峻なルンゼ(注3)に吸い込まれるようにして消えた。

## 事故後の行動

これより本隊が事故者の高谷と合流するまで行動記録を①本隊と②高谷とに分けて記述する。

### ①本隊(大木、花谷、岸本、横山、片寄 ※高谷については後載)

少し離れて先頭を歩いていた岸本も後ろの騒ぎにすぐに気づき引き返した。5人集合し高谷が滑落した方面の谷を注視した。程なくして現場の稜線からはるかに離れた下方(滑落した先に合流する東仙人谷付近)をザックらしきものがものすごい勢いで通り過ぎるのを五人も肉眼で確認。その後しばらく谷を観察するが高谷らしき人影は確認できなかった。下の東仙人谷を通り過ぎたのが高谷なのか、あるいはザックだけなのか判断はできず、高谷がどこまで滑落したかは事故現場からは不明だった。

とりあえず残ったメンバーの安全を確保するために通過してきた白萩山直下のゆるやかな鞍部まで退却することになった。同時にすぐに大木は無線機で馬場島の県警と、花谷は携帯電話で松本の現役会員の佐藤、OBの中嶋氏に連絡を試みた。

事故直後であったのと一年生の片寄の安全を考慮し、行きにフィックス(注4)なしで通過してきたところもフィックスして通過することにした。交信と同時進行で横山が工作を行う。その間岸本は高谷が落下したルンゼを少し下ってみるが50メートルほど下るとルンゼは急峻になりその先は崖になっていてルンゼはそこで切れていた。斜面の真中には高谷が着地し滑落していく跡が残っていた。

## 7：35 馬場島と交信

一本目のフィックスが終了したあたりで、一度花谷が遠く離れた風にゆれる木を高谷と誤認した。フィックスを片寄が通過したところで5人一度集合する。大木と花谷は頻繁に交信を繰り返していた。無線より先に携帯電話で馬場島の富山県警に連絡がついた。(無線は県警からの指示で145.00MHzから145.02MHzに周波数をずらして交信をした。後に高谷を発見して合流し、赤谷尾根、ブナグラ谷を下降するまでの間、交信は携帯電話と無線の両方を用いて県警と連絡を取り合い、時折携帯電話で松本の佐藤に状況報告を行う形をとった。佐藤との通信記録は9Pを参照。) 大木と花谷が交信している間に岸本と横山の二人は先行してその先もう一箇所急な所にフィックスを設置しに行った。

## 8：10 高谷発見

横山と岸本で2本目のフィックスを設置しているとすぐに大木・花谷・片寄の3人も追いついてきた。フィックスの完成を待つ間、突如片寄が「英太郎だーっ!!」と谷を隔てた向かいの尾根を指差して叫んだ。先の誤認もあったので一同うかつに喜ぶわけにもいかず、興奮する片寄を静め、近くにいた花谷が確かめる。すると今度ははっきりと高谷であることを

確認。こちらの掛け声に答えるようにピッケルを振っているとのことだった。

先頭にたってフィックス工作をしている横山にも高谷の生存を伝えた。5人の誰からともなく歓声が上がり隊は興奮につつまれた。

フィックス設置終了と共に登攀具一式を持っていた岸本は一足先に高谷のいる尾根に向かった。横山は片寄のフィックス通過後二人でその先の安全地帯まで移動し、大木と花谷はフィックスの回収を行った。花谷は横山に行きがけに休憩を取った安全なところに片寄を連れて行った後、岸本を追うように指示を出した。

先行の岸本は白萩山の直下から高谷のいる尾根トラバースを開始した。70メートルほど行くと下方に高谷が急な雪壁をこちらに向かっているのがわかった。合流後の救出にザイルの必要性を感じ、手信号で高谷にその場でとどまるように指示をしてザイルを取りに戻ってから再び高谷のいる地点へと向かった。

## ②事故者、高谷の行動

### 7:05 滑落

滑落後すぐに大木の叫び声が聞こえ滑落を止めようとしたが止められず、すぐに大きく跳ねとんだ。それから後は停止するまで記憶はない。

目がさめると頭が下向きにザックを背にして横向きの姿勢で自然に雪の斜面の上で停止していた。体に特別痛みはなかった。なぜそこにいるのか、どうやって落ちたのか、何の山行だったのかすぐには思い出せなかった。現在地の確認を試みたが前述のように状況把握もままならない状態であったためわからなかった。

とりあえず自分の落ちたところを上り返せば他のメンバーに合流できると考え、ザックはその場に残してすぐ近くの尾根を登り始めた。登り始めた尾根は自分が滑落した稜線に続く尾根だと思った。

(補足：高谷の登りかえした尾根は実際は滑落した稜線に続く尾根ではなかった。また滑落後しばらくして稜線上のメンバーが見た東仙人谷付近を通り過ぎた物体は、高谷が停止した場所に残したザックがその後すぐに再び滑落したものと推測される。)

### 8:10 メンバーに発見される。

自分の登っている尾根と離れた稜線にメンバーの人影を発見。自分の存在を知らせるべく必死に尾根の登高を続けた。途中メンバーに向かってピッケルを振った。

その後片寄が高谷の存在に気づき合流へ向けて行動が続くこれより先は記述の主体を一本化する。

### 8:50 岸本と高谷合流

高谷のいる地点に向けて上から目算をつけて尾根の横のルンゼを下る。しばらく下ってからトラバースしていると「先輩、先輩」と高谷の声がした。声のほうに雪壁を乗り越えるとすぐ20メートルほど先に高谷がいた。荷物はなく顔面は出血と裂傷のため赤かったが、遠目に目立った外傷はなくなおも動いてこちらに向かおうとしていた。風が強く急な雪壁の上だったので、その場で足場をつくり安全を確保するように指示をだした。しかし若干のショック状態にあったのか指示の飲み込みが悪く、指示を止めてすぐに本人のところへと向かった。この間に花谷、大木、片寄の3人は合流して白萩山直下の安全地帯へ移動した。またヘリの出動が一度決定し、その連絡が入った。

8時50分岸本は高谷と合流。すぐに簡単な外傷の確認をした。高谷の呼吸は少し荒く下腹部横からでん部にかけて出血が気になるところだったが、内臓破裂等の兆候もなく手足の骨折もなく驚くほどの軽症だった。あれほどの滑落をしながら生きていることさえ奇跡なのであるが、よっぽど悪運が強いのだろうか。アイゼンもヘルメットもピッケルもそのままだった。

岸本が高谷にハーネスを装着させロープに連結している最中に横山も合流し、高谷に簡単な食べ物とお茶を与えた。

そこからは横山が先に進んで上から高谷を確保し岸本が横でサポートする形で尾根の残りを登りきることにした。登高をはじめてまもなくして大木も合流。大木はヘリの出動を横山に無線で知らせようとしたが横山の無線が不調だったため直接知らせにきた。(しかしその後大木の移動中に強風のためヘリの出動はなくなった。この出動取り消しの連絡は花谷の携帯にされた。) 50m3ピッチで尾根を抜け平坦地に出た。大木と入れ替わりに花谷も合流し高谷をサポートした。

### 9:40 全員合流

白萩山直下の安全地帯に高谷が到着し、事故発生から3時間弱、再び6人が集合した。高谷にツェルトをかぶせ腹部の傷を見る。出血が少し多いものの裂傷とわかった。高谷は依然軽い興奮状態だったが奇跡的に軽症で行動可能であり、自力下山を決定した。西の空には灰色の雲が立ち込め、天気の悪化は一目瞭然で、急ぎ行動に移った。赤谷尾根からブナグラ谷を下降するまでは高谷は常にロープと連結し確保しながら下降した。昼を過ぎたあたりから風が異常に強くなり、特に赤谷尾根上部はあまりの強風に時折細い尾根にしがみつくような状態だった。

### 13:05 ブナグラ谷下降

高谷を確保しながら慎重に赤谷尾根の上部を下り終えると風はどうしようもないくらいに強くなり稜線上の行動は不可能になった。協議の結果そこから緩やかに馬場島まで続いているブナグラ谷を下るのが一番早くかつ安全で、明るいうちに馬場島へ帰り着くことも可能ということになり、念のため弱層テストをおこないブナグラ谷を下った。はじめこそ傾斜があったが途中からは傾斜も落ち、まるで5月の涸沢を歩いているような感じだった。

ブナグラ谷を下降し始めてすぐに雨がまばらに降り始めた。今年は春の訪れが早いためか谷のあちこちに大きなデブリ(注5)が見られた。ブナグラ谷下降の選択は功を奏し2時間後の15時には赤谷尾根の末端に到着した。ここからは雪に埋もれた林道を歩くのだが林道に雪上車が駐車してあるのが見え、その場には県警の隊員の方が1名待機していてくださった。ご好意に甘え雪上車に乗せていただき馬場島を経由しその先林道途中まで送っていただいた。

### 17:30 伊折着

下車後残り6キロほど林道を紺屋に合わせてゆっくりと歩いた。高谷はだいぶ疲れている様子だった。伊折到着と同時にバケツをひっくり返したような豪雨となった。その後富山市内の病院に向かった。松本から駆けつけてくれた松崎と合流。最終的に富山日赤病院で精密検査、治療を受け松本に帰った。

#### 【注記】

- 1、気温の高い春先などに水分の多い雪がアイゼンの裏に付着してしまうこと。
- 2、ルンゼ…急峻な谷状の岩溝。ドイツ語。
- 3、フィックス…危険箇所にロープを渡すこと。ロープを固定(fix)することから。
- 4、弱層テスト…山行中雪崩の危険性を図るために行う簡単なテスト
- 5、デブリ…雪崩の跡。土砂のように雪が堆積している。「debris：破片の山、残がい」

## 留守本部の動き

- 7:44 花谷から佐藤への第一報「高谷が白ハゲ北西側ルンゼへ滑落。高谷は見えない。」  
佐藤、リーダー部員の集合を呼びかける。
- 8:12 花谷から佐藤への第二報「高谷が自力で登り返している。一時間ほどで合流。  
合流したら怪我の状況確認のための連絡をする。またすでに警察とは連絡をと  
り合っている。」  
佐藤、松寄、川井、BOXに集合。梶原、井上は実家に帰っているため、  
怪我の状況がわから次第考えるとのこととおりあえず待機。
- 9:46 一時間たっても本隊からの連絡がないため、富山県警に電話をかける。県警は無  
線で連絡をとり合っているとのことで、今の本隊の状況を聞く。「合流はしたが  
怪我の有無、大小はわからず。しかし命に別状はない。また、悪天のためヘリは  
飛ばない。」
- 9:52 保護者へ連絡するが、留守。
- 9:55 馬場島警備派出所にも電話し、情報をもらう。「高谷の荷物はなくなった。電波  
の状態が悪く、携帯ではつながらない。警備派出所は連絡次第で動く。」
- 10:08 花谷から佐藤へ第三報。高谷の怪我の状況を聞く。「骨折なし。顔面擦傷。わき  
腹少々深い傷。臀部擦傷。その他、右肩など所々に痛みあり。しかし、自力で歩  
ける。自力下山をし、サポートはいらない。」
- 10:15 横山（輝）、BOXに到着。
- 10:37 保護者へ連絡するが、留守。
- 13:09 花谷から佐藤へ第四報「赤谷尾根 1800m付近からブナグラ谷へ降りる。どんなん  
に遅くなっても今日中には下山する。」
- 14:00 松寄、伊折へ出発。
- 14:51 馬場島からの情報「本隊はブナグラ谷出合にいる。」  
松寄が向かった旨を伝える。
- 15:16 大木から佐藤へ第五報「本隊が馬場島に到着。」
- 15:32 保護者へ連絡。妹が出る。
- 15:45 保護者へ連絡。妹が出る。
- 17:52 馬場島警備派出所へ電話「16:00ころ、本隊が馬場島を出た。皆元気である。」
- 18:18 花谷から佐藤へ第六報「上市厚生病院にて高谷を診察。」
- 18:45 松寄、本隊と合流し、富山日赤病院に向かう。

ここで一応の収束

## 事故分析・反省

今回の事故の直接原因は高谷本人がアイゼンを雪面にフラットに置けず、横に置いてしまった為にアイゼンの歯がきかず、スリップしてしまったことにある。言うなれば本人のミスである。FIXをはるべきであったか、事故現場に関してはFIXをはる場所ではなかった。しかし、一年生の事故原因を本人の不注意で片付けるわけにはいかない。勿論スリップは一年生に限らず、どんなベテランにも有り得る事故であるが、ベテランと一年生が同じ要因で事故を起こしたとしても、成長カリキュラムの完成された山岳会においての『一年生の事故』は、本質的には違うものとして捉えねばならない。そして上級生には指導的立場、監督としての責任がある。

たった一歩のアイゼンワークが事故につながる。問題はその可能性が高い、まだまだ技術が未熟な一年生を3月とはいえ、積雪期の剣岳に連れて行ったことである。つまり『連れて行ったこと』が最大の事故原因といえる。この事故は起るべくして起きた、リーダー大木の計画段階での判断ミス、また承認においての上級生の判断ミスであり、あの場で起きなくとも、北方稜線の先で起きた可能性は大きい。

なぜそのような判断ミスを起こしたのか、その最大の要因とも言える上級生の過信、会全体の過信・怠慢などの背景がどのように事故にあらわれたのか。『入山前』、『事故当日』、『事故後の処理』と三段階に分けてそれぞれの反省を踏まえ、分析したい。

### ① 入山前の反省

#### 《メンバー構成の失敗》

- ・1年生を冬の剣岳に連れて行くべきか否か、当然1年生には早すぎる課題であった。やる気がある、今回一年生2人を連れて行った基準であった。これが一番大きな反省。剣を知らない上、『知らないこと』を重要視しなかった。山に対する油断であり、過信であった。山に対する警戒心が弱く、浅はかな判断といえる。山三昧の大学生活、その慣れから生じた怠慢・過信だった。
- ・また隊を編成するに当たって、上級生は4年の横山以外は一年生の高谷と登ったことがなく、高谷の体力、アイゼン歩行能力、登攀能力についてほとんど知らず、山岳会を一年続けていればという、『経験』に関しては曖昧な評価をしていた。

#### 《山行承認が機能していない》

- ・山行が綿密に下調べ、下見がなされているか、隊員構成に問題は無いか、承認を下ろす以上は下ろす側にも責任があり、当然慎重に検討するべきである。今回、上級生で固められていたということもあり、その安心感がいい加減な承認につながった。双方緊張感に欠けていた。高谷が個人山行に参加していないなど、山に登っていない現実を軽視し、

計画を立てた・承認を下ろしたことに事故の発生源がある。

- ・山行承認の段階で体力・経験の少ない高谷は剣岳の前に後立山連峰の縦走に参加し、様子をみるとことであったが、後立山の縦走が中止になったにもかかわらず何の配慮、話し合いもなかった。山行承認が有効に働いていない上に、ただの通過儀礼となっていた。今後は山行承認での『決定』を最優先し、その『決定』が有意義であるような承認を下ろさなければならない。

#### 《技術面、経験に関する準備不足》

- ・アイゼン岩トレの不足、高谷本人の縦走経験の不足があげられる。アイゼン岩トレはアイゼンワークを鍛え、縦走経験はアイゼンワークを体に沁み込ませる。その準備された『体』を作らずに冬山に連れて行ったのは大失敗。勿論本人が高い意識、緊張感をもってトレーニングし、経験を積むのが理想だが、それがなされなかつた場合1年生ではその危険性を察知することは出来ない。故にこれは監督責任のある上級生の責任といえる。
- ・現実に剣岳に挑むには高谷は体力が足りなかつた。アプローチで隊に遅れをとるなど、事前のトレーニング不足を感じた。トレーニングに関しては個人の責任に任せるという方針を貫いているので、上級生は個人の体力づくりには口出しをしていない。体力づくりは本人の責任とする会の方針はあくまでも高い意識に基づいているが、それが満たされていない場合は容赦なく計画から外すのも高い意識といえる。高谷が準備不足だということを上級生は事前に知っていたが、厳しさのない優しさから連れて行ってしまった感がある。冬山の危険を考慮すると、その優しさは命取りであり、上級生としての厳しさ、山を見る厳しさが抜けていた。

#### 《上級生の過信》

- ・上級生が4人いれば一年生をサポートできるという、過信が上級生、会全体にあった。例え、未熟な一年生といえども上級生でサポートすればどうにかなると、あくまでも山を歩くのは本人という根本を無視するような判断、また風潮が会の中にあった。アイゼンワークはたった一步の失敗で悲惨な事故につながるという事実を軽視していた。クラストした斜面で滑って落ちる人間を止めることは出来ない。

## ② 事故当日の反省

#### 《歩行技術に関して》

1年生はアイゼン歩行技術がまだ未熟であり、それを補う上級生の雪面の『カッティング』、『注意』があるべきであった。

### 《FIXに関して》

北方稜線の核心に至る前に FIX をベタ張りしているようでは剣岳は超えられない、必要以上に FIX は張らないというのが上級生の基本方針であった。事故当日は昼から天候が崩れるという予報だったので少しでも早く大窓に着き、嵐に備えたいという焦りもあり、合宿なら FIX を張るであろう箇所も上級生が前後から挟み込み、指示を与えるという形でクラスト斜面などを通過した。一步の過ちが死を招くのが冬山であるならば、例えまだ核心が始まっていないとはいえ、一年生を連れている以上は隊の底辺に FIX の有無は合わせるべきであった。

事故現場は急な雪壁を超える（ノーザイル）、平坦になった稜線のトラバースであった。このトラバースでは FIX は張る必要はなかったが、斜面がクラストしているという『注意』はなかった。その前は緊張する雪壁であり、その通過後緊張感が緩んだ可能性は大きい。

### ③ 事故後の反省

#### 《コールをしなかった》

事故発生直後には『コール』もしくは『笛』による『呼びかけ』を当然するべきであったが、風が強いこと、動搖、圧倒的な絶望感のため、忘れてしまったとしか言わざるを得ない。事故後の高谷は意識を取り戻してから『コール』をしたとのことだが、これは届かなかった。『声』が届かないときは『笛』という手段を使う指導が行き届いていなかった。

#### 《指揮系統が確立されなかった》

本来事故が発生した場合、直ちにリーダーという立場をはっきりし、指揮系統を確立して、二次遭難に備えるのが定石であるが、個人の判断による単独行動が目立った。単独行動とは2つ目の FIX を張り終わった岸本が高谷と合流するべく一人先に行つたこと。それを追いかけた横山も単独。ヘリコプターの準備を伝えるため向つた大木も単独。単独の者がスリップなどで事故を起こし、行方をくらませる可能性は否めない。最低2人で行動するべきであった。

現場では常に臨機応変な対応が求められる。事故直後、とりあえず安全地帯まで FIX を張り、5人そこで揃ってから今後の方針を決めるということにして移動を開始したが、2つ目の FIX 工作中に高谷が発見され、5人全員の合流には時間がかかるのでその前に岸本が動いた。リーダー大木は最後尾を交信しながら進んでいたので岸本のことは事後報告。横山はその時 FIX 通過中の片寄を見ていたので同時に動けなかった。動搖のせいか片寄の動きは硬く、FIX 通過に時間がかかっていた。この時、岸本は後続を待ち、横山と二人で行くべきであった。

結局リーダー大木が FIX を回収して追いついたときには残っていた横山も、岸本の単独の危険性を感じた花谷の指示により片寄と安全地帯まで進み、樹林に片寄を残して岸本に追いつくということになっていた。指示はリーダーから出されたのではなく、個人の判断でなされていた。

これはリーダーの指示を仰いでいないという見方をすれば反省にあたるが、この場合の面子を考えると、各々先を読み、即座に分業し、自分の役割を果たしていた。加えて風は強いものの見晴らしが利く、2つの FIX を超えれば歩行に問題がないこと、予想外の高谷の生存、白萩山の尾根を登り返していることを早期に確認したこと、上級生が4年、5年、OB と個人に任せられたこと、大木、花谷は交信・片寄のサポート、岸本、横山は先行、高谷の保護と分業が成立していたことなどの好条件が背景にあり、単独行という反省はあるものの、この場合リーダーの指示を仰がずとも上級生同士の意思疎通はなされていたと判断したい。

#### 《ステップについて》

『先ずはステップを切る』、新人合宿で一番最初に教えられる事であるが、上級生を含め、おろそかになっている。高谷と合流寸前の岸本は何度も『ステップを切れ』という指示を出したが、高谷は動搖が収まらず、側に寄るまでステップを切れなかつた。新人合宿のみに限らず、プレ冬、冬合宿でも上級生は注意を払うべきである。事故後の動搖時には体に染み付いていることしか出来ない。『コール』といい、基本を徹底させるべきである。

#### 《好条件について》

あの時、ガスが立ち込めていたならば我々は高谷を見発見することができず、見殺しにしていた可能性が高い。午後の荒天を考慮すると自力での捜索は時間的にも技術的にも限界があるといえ、自分達の安全確保のために早期下山した可能性が高い。あれだけの事故で高谷が軽傷だったこと、自力で登りなおしてきたこと、展望が利いたこと、一日で脱出できる場所にいたこと、多くの要因がプラスに働き結果を出したと言えるのではないだろうか。

#### 《携帯電話について》

docomo は非常に有効。携帯に接続する充電器は必携アイテム。今後は冬合宿などにも有効な通信アイテムとして、携帯電話と寒さに弱い電池を補う簡易充電器は必携である。

#### 《トランシーバー》

横山のサーバーが不調だった。入山前のチェック不足。

### 《手信号》

風が強く声が届かないで、手信号でザイルの長さ、コールの代わりとした。非常に有効であり、日頃から会の訓練事項、会の登攀システムに取り入れるべきである。勿論相手が肉眼で確認できるという条件付きではあるが、冬の雪稜などでは特に有効かと思われる。主な手信号として『あと 10m』『あと 5 m』『ザイルいっぱい』など。

### 反省

高谷英太郎

今回は、積雪期の剣であわや大惨事となりえた事故を起こしてしまった。ここでは今回の事故を振り返って、今回の事故の経験が今後山岳会で活動していく上でも、無駄にならないように反省を含め少し考えてみようと思う。

今回事故を起こしてしまった大きな原因として、一番に挙げられることは、やはり自分の実力と山のグレードがマッチしていなかったことだと思う。今回の山行は、積雪期の剣とあって、憧れの方が先行してしまい、自分の実力をかえりみることなく山行に参加してしまった。今、冷静になって自分の実力を考えてみると、冬合宿後のとして八ヶ岳しか経験してなかったことも踏まえて、剣に行くような実力は身に付いていなかったと思う。今後は自分の実力をしっかりと踏まえて山行に参加していけたらと思う。また、同時に今回の事故では登山の危険性も再認識できたので、そのことも踏まえて登山を行ってゆけたらと思う。

最後に、今回の事故で多大な心配、迷惑をかけた OB の方々や学校、家族や山岳会の仲間に謝罪と感謝の表します。

## 2002年度山岳会CL・佐藤裕樹から

どのような山を登るにしても山行は困難を伴うものであって危険を伴ってはならないものであります。困難は頂に立ったときに充実感を与えるものであります、危険は事故につながります。困難と思われていたものが危険となるとき事故は往々として起こるものです。困難が危険となるとき、それは危険予知・回避能力が働かなくなるときであります。

今回、事故が起こり、承認を出した側としては深い後悔の念を感じています。承認の段階から危険予知・回避が働かない働かない大きな問題を抱えた山行であったことを認めざるを得ないからです。登山における危険予知・回避能力は登山を通じて体験的に培われるものであり、我々に出来ることは謙虚に山と向かい合い、段階的に山行を重ねそれら能力を身につけることとなります。このことを認識した上で我々は改めて各個人の段階に応じて技術・経験の向上を強化していきたいと思います。

最後になりましたが、事故後多くの方に様々な形で支えられました。深く感謝いたします。

## 山行リーダー・大木信介から

事故にも色々あるが、この事故はひどい事故だ。原因が上級生の入山前の判断ミスから生じている。なぜここまで自分に、上級生に油断・怠慢が生じたか。この内面的な問題を解決しなければ同じ事故は何度でも繰り返されるだろう。山ではピリッとしている上級生も計画段階での失敗はお粗末な話である。先に挙げたように山三昧の慣れが悪い形になった。

反省を通して『何故一年生を連れて行ったんだろう』と今では逆に不思議である。冷静に考えてみればただ無謀なだけだ。『無茶はしても無謀はしない』それを信条に登ってきたつもりだったが、大学最後の締めでとんでもない判断ミスを犯してしまった。

この事故を通して己の未熟さが頭になったわけで、半人前、そのくせ随分と甘く見ていた自分の経験不足、認識不足だ。幸いにも高谷は大怪我を負う事もなく、今回の外的というより内的な反省を噛み締めることができる。しかし、ふと悪い結果の方を考える…ぞつとする。

反省だけならサルにも出来る。上級生一同厳しさを取り戻して山に取り組みたい。

最後に、富山まで駆けつけてくれた松崎、朝っぱらから夜遅くまで集まってくれたSACの仲間たちに感謝したい。

## 事故に思う

稜線でおぼつかない足取りの高谷が足を上げ、『あ、これはまずい置き方をしそうだ…』瞬間にそう思い体が凍りついた。息を飲み見守ると、アイゼンは横向きに置かれ、高谷はバランスを崩した。高谷が落ちてゆく。瞬間的な『高谷ー!! ピッケルストップじやー!!!』のシャウト、滑落を止めようと急いで掴んだもののあっさり手から離れ、吸い込まれるようにルンゼに落ちてゆく。。。その一部始終を僕は見た。今も目に焼きついている。嫌味なスローモーションのような、とても長い、ものの数秒だった。

残されたのは果然と立ち尽くしている自分だけ。『死んだ…』そう思った。生存の可能性など全く信じることが出来ず、瞬間に事後処理が頭の中をグルグルと回った。親御さんになんと言えば…。高谷よ…。佐藤になんと言えば…。OBになんと言えば…。誰にも合わせる顔がなかった。おまけに徳沢のお墓に80°ぐらいいの石を運ぶ自分で想像した。

しかし奇跡が起き、高谷は生きていた。おまけに登りかえして来る。

一年が一人で。不安だろう、痛かろう、恐かろに。

生きている高谷を肉眼で捉えたとき、感情が働かず、戸惑った。嬉しい、が、それは感情ではなく言葉でしかなかった。遠めにやっとこ確認できる高谷に見とれ、面食らった。彼方の尾根を一人登り返す高谷は『感動ドラマ』などという生やさしいものではなく、命の強さ、たくましさ、美しさ、全てがあり、現実的な『厳しさ』だけがそこにあった。その『厳しさ』に圧倒された。

帰りの林道で岸本は、『大学5年間で一番感動した…』そう言っていた。印象的な同期の一言。僕はまだ動搖していたのだろうか、感動や感情が働かなかった。何も動かなかった。

その感動は後から後からやってきた。時間が経てば経つほど感動がこみ上げてくる。あのときの感情が解き放たれたようだ。僕は今、とても感動している。

生きるということ、一番大切なことを高谷に教えられたと思う。

高谷、ありがとう。よく生きていた。また懲りずに登ろうや。

大木 信介

剣には神様が御す。そういわれている。

4月に再び剣に入った。五竜から黒部を越え、北方稜線を歩き、早月から下山。事故現場は通らないものの現場はよく見渡せた。奇跡の生還だったと改めて思った。そして未知だった北方稜線の核心。こりや一1年じや登れんわ、そんな箇所ばっかりだった。行かなくってよったんだ。行っていたら…

そう思うと不思議だ。自分の計画の甘さはさることながら、何もかもが実はうまくいっていたんだと不思議な気分になる。高谷はあの大フォールで何故か、奇跡的にほぼ無傷。その日に下山。その後の荒天。あのまま進んでいたらどうなっていたんだろう。北方稜線で事故を起こしたにちがいない。もっと悲惨な。

不思議は続く。東仙人谷に流れたザックが後日親切なガイドの手によって高谷の元に戻ってきた。何事も無かったかのようにこの事故は収束する。何かに導かれるように…

事故当事者の高谷には申し訳ない話だが、あれはあれで命を救われた気がしてならない。何によってか?よく分からんが不思議だ。

やはり剣には神様が御すのだろう。